

う つ ぼ 物 語 よ り (四)



関 根 慶 子

四、仲忠の孝養その四

かくはるかなるほどをし歩あしくも苦しうおぼえて、「いかでこの山にさるべき所もがな。近くて養はむ。」と思ひて、山深く入りて見れば、いみじういかめしき杉の木のとより物をあはせたるやうにてたてるが、大きな屋のほどにあきあひてあるを見て、この子の思ふやう、「こゝにわが親を据ゑ奉りて、拾ひいでん木の実をもまづ参らせばや」と思ひて、寄りて見るに、いかめしき牝熊、牡熊、子を生み連れてすむ空洞うつほなりけり。出で走りてこの子を食はまむとする時にこの子のいはく、「しばし待ち給へ。まろが命たち給ふな。まろは孝の子なり。親・兄弟はらちもなく、使ふ人もなくて、荒れたる家にとゞ一人すみて、まろがまらする物にかゝり給へる母を持ち奉れり。里にはすべきかたもなければ、かゝる山の実・葛くわの根をとりて親にまゐらするなり。高き山、深き谷をおりのぼり、まかりありきて、朝あしたにまかり出でて、暗くらうまかりかへりし程に、うしろめたうかなしく侍れば、かゝる山の王の住み給ふとも知らで、この木の空洞に母を据ゑ奉りて、薯蕷いも一筋を掘り出でてもまづまゐらせむ。また遠き道をも親のためにとまかりありけば、苦しうもおぼえねど、つれなくと待ち給ふらんもかなしう侍れば、ちかくと思つた給へて見侍りつるなり。されど、かく領じ給ひける所なればまかり去りぬ。むなしくなりなば、親もいたづらになり給ひなん。おのが身のうちに、親を養はむに用なき所あらば、施せし奉るべし。足なくばいづくにてありかん。手なくばなに、てか木

の実・葛の根をも掘らん。口なくばいづこよりか魂かよはむ。腹・胸なくばいづくにか心のあらむ。この中にいたづらなる所は、耳のはた・鼻のみねなりけり。これを山の王に施し奉る。」と涙を流して言ふ時に、牝熊・牡熊・荒き心を失ひて、涙を落して、親子の悲さを知りて、二つの熊子供を引き連れて、この木の空洞をこの子に譲りて、他峯に移りぬ。その時この木の空洞を得て、木の皮を剥ぎ、広き苔を敷きなどす。薯蕷掘りせめし童出で来て、空洞のめぐり掃き清めありければ、前より泉出で来る。掘りあらためて、水の流おもしろくなりぬ。

〔口訳〕 仲忠はこのように（三条京極から北山までの）遠い道を、毎日ゆき来するの苦しく思われて、「この山に棲むのに適当な場所があるといいのだが。お母さんをお側にいて養ってあげたい」と考えて、山深く入って行ってみると、たいそう立派な杉の木が、根本からちょうど物を合せたように寄りそって立っていて、大きな家ぐらゐの隙間が出来ている所のあるのを見て、仲忠は、「ここにお母さんをお住ませして、捨った木の実などもすぐさしあげたいものだ」と思って木のそばに寄ってみると、それは恐ろしい牝熊と牡熊とが、子を産んでいっしょに住んでいる空洞であった。牝熊と牡熊とが走り出て来て仲忠を食べようとしたので、その時に仲忠が言うには、「ちょっと待って下さい。私の命を殺さないで下さい。私は孝行の子なのです。親・兄弟もなく、召し使う人もなくて、荒廃した家にただひとりいて、私のさしあげる物を召しあがって生命をつないでいらっしゃる母が私にはあります。里では食物を探しようもないので、このような山の実や葛の根をとってきては、親にさしあげているのです。高い山や深い谷をのぼったりおりたりして歩き廻って、朝家を出て暗くなつて帰ってきましたので、母のことが心配で悲しいので、このように山の王である貴君がたが住んでいらつしやるとも知らずに、この木の空洞に母をお住ませして、芋一筋掘り出しても、すぐに母に差し上げようと思ひ、また、遠い道を往き来するのも、親の為にするのですから別に苦しいとも思ひませんが、母がひとりで寂しく待っていらつしやるだらうと思へば悲しゅうございますので、近い所でお世話しようと考えて、それにはこれが適当だと思われたので、この洞穴を見てみたのです。けれども、このように貴君がたがすでに住んでいらつしやる所ですから、退却します。私が死んでしまうならば、親も死んでおしまいになるでしょう。私の身体で、親を養うのに役に立たぬところがあるならば、貴君がたにさしあげます。もし足がなければ、どの部分を使って歩けましょうか。もし手がなければ何でもって木の実をとり、葛の根を掘ることが出来ましょうか。もし口がなければ、どこから魂を

通わすことが出来ましようか。もし腹や胸がなければ、どこに心があり得ましようか。ですから、私の身体の部分で不必要な所は、耳の端と鼻のみねです。これを貴君にさしあげます」と涙を流しながら言うと、牝熊も牡熊も荒々しい心をなくして、涙を流し、親子の恩愛の深さを知って、この木の空洞を仲忠に譲り、自分たちは子どもをひき連れて他の峯へ移って行った。そこで、仲忠は、この木の空洞を手に入れて、木の皮を剥ぎ、広い苔を敷きつめたりなどして、住めるようにした。すると最初に芋を掘ってくれた童があらわれて、この空洞の周囲を掃き清めてゆくと、その前から泉が湧き出てきた。それを掘り改めると、水の流れも趣あるようすとなった。

## 五、仲忠の孝養その五

かへす／＼喜びて母の御もとにゆきて言ふやう、「ほかにいざ給へ、まろがまかる所へ。こゝとてもまろならぬ人の見えこそあらめ、かく出でてまかりありく程に、つれづれと待ち給ふ程苦しうおはしますらん。かくてあしうもまかりありかむと思へど、人の馬・牛をかかせても、使はゞ、親の御為にさる下衆の母と言はれ給はんこと、思ふ。ましてよきことはた難かるべし。おなじくは人も見ぬ山にこもりて、人に知られじとなむ思ふ。心には片時にも通はむ、飛ぶ鳥につけても奉らんと思へど、それもえさもあらず。いざ給へ、まろがまかる所へ。さてもものし給はば、木の実一つにてもやすく参らせん。まかりありくことも休まむ」と言へば、「何かは、我が子のいませむ方には、いづちへもいづちへも行かざらむ。里に住めどもあこよりほかに見え通ふ人のあらばこそ」と出て立つ。この家のうちには物もなし。屋もみな毀れ果てにたり。かの父の遺言し給ひし琴どもみな取う出て、又弾きし琴どもこの子して運ばせて、今母もろともに行くに、よろづのこと悲しとはおろかなり。涙川井瀬も知らぬみどり子をするべとたのむ我や何なる

など言ふ程に空洞に到りぬ。いと深き山道の程堪へ難く聞きしかど、空洞ともおぼえず、前一町ばかりの程はあきらかにはれて、同じ丘と言へど、人の家のつくれる山のやうにて、木立をかしう、所々に松・杉・花の木ども・果物の木数をつくして無き物無く、椎・栗森をはやしたらむごとく、めぐりて生ひ連れり。すべて仏の現じ給へる所なれば、かゝらざらん人も住まゝ、ほしげに見えたり。空洞の前に一間ばかりさりて、払ひ出でたる泉の面に、をかしき程の巖立てり。小松所々にあるに、椎

・栗その水に落ち入りて流れ来つゝ、思ひしよりも使ひ人一人得たらんやうに、たよりありておぼゆ。朝に出て、夕に帰りし暇のなさもやすまりぬ。たゞ眼のまへなれば、我も人も箱の蓋なるものを引き寄するやうにて、煩ひなくて、たゞうち遊びてあかしくらせば、こゝにて世を過さんと思ひて子に言ふ、「今は暇あるを、己が親の賢かしきことに思ひて教へ給ひし琴、習はしきこえん。弾き見給へ」と言ひて、りうかく風をばこの子の琴にし、ほそを風をば我弾きて習はすに、さとく賢かしく弾くこと限りなし。

人氣もせず、けだもの、熊、狼ならぬは見え来ぬ山にて、かうめでたきわざをするに、たま／＼聞きつくるけだもの、たゞこのあたりに集りて、あはれびの心をなして、草木もなびく中に、峰ね一つを越えていかめしき牝猿子供おほく引き連れて来て、此ものゝ音をめで、聞く。おほきなる空洞を又領じて、年を経て、山に出でくる物取り集めて住みける猿なりけり。この物の音にめでて、時々木の実を持ち、子供も我も引き連れて持て来。かくしつゝ、この琴弾くを聞く。

〔口訳〕 仲忠はかえすがえす喜んで、母の所へ行つて、「さあよそへ参りましょう、私の行く所へ。この今いらっしやる所も、私以外の人が訪ねて来るならばともかく、誰も来る人もいないので、私がこのように外出して歩き廻っている間、おひとりで寂しく待っていらっしやるのも苦しくお困りでしょう。出来るならばこのままここに留つて、よかれあしかれしてゆこうと思ひますが、人が馬や牛を飼わせてでも私を使うならば、その為にお母さんがあんな下衆の母だと笑われるだろうと思つたのです。そんな仕事でもしないならば、まして、ここにはそれ以上良いことはほとんどないでしょう。それならば、誰も見る人のいない深山にこもつてしまつて、誰にもようすを知られまいと思つたのです。心では、すぐにもお母さんの所へ戻つて来よう、また拾つた食物をも鳥に托してでもすぐにさしあげたいと思つけれども、実際にはそうもいきません。さあ、私の行く所へいっしょに参りましょう。そこにおいでになれば、木の実一つだつてもすぐにさしあげることが出来ます。遠い道を往き来することもしなくてすむでしょう。」と云うと、母は、「どうしてわが子の行かれる所へいっしょに行かぬことがありませんか。里に住んでいても、貴君の外に訪ねて来る人があるならばともかく、誰も来る人もいないのですから。」と言つて仲忠といっしょにその京極の家を出た。この家には何の道具もなく、屋敷もすっかり荒れ果ててしまつていた。それで、父親の俊蔭が遺言しておいた琴をみな取り出して、更に弾き馴れた琴どもも皆仲忠に運ばせて、母も仲忠といっしょにこの家を後にした

が、何事につけ非常に悲しく思われたので、このような歌をよんだ。

まだ何の分別もつかないこんな幼い子を道案内として頼って、涙にくれながら今まで住みなれた所を去って深山へ移ってゆく私は、一体どうしようというのだろうか。

などいっているうちに、空洞についた。京からはずっと離れたたいへんに奥深く入りこんだ山道とて、非常に難儀な所と聞いていたけれど、実際に来てみると、空洞とは思われない程で、前一町ほどはすっかり見通しがきいて、丘とはいっても人家にある築山のような感じであり、木立も趣があり、所々に松や杉、花の木、果物の木が群立っていて、一種類も欠けるものがなく、椎や栗の木が周囲にまるで森のように生い茂っていた。何事につけ、仏様が姿をあらわされた所であるからたいそうすぐれていて、こんな落ちぶれた人ではなくて、もっと身分の高い人も住んだらよいように思われる。空洞の前一間ばかり離れた所に流れ出ている泉の面には趣ある形の巖が立っている。小松が所々に生えていて、椎や栗の実がこの水の中に落ちれば流れて来て、意外にもまるで召使いを一人得たようで、便利に思われる。仲忠は、朝家を出て夕方帰るといふ忙しさもなくなつた。食物もすぐ目の前にあるので、仲忠も母もちようど箱の蓋のあるのを引きよせるように手近に引き寄せて食べる事が出来るので、何も面倒なことがなく、ただ遊んで毎日を暮していくので、母はここで一生を過そうと思つて、仲忠に、「今では暇もあるようだから、私の親が大切なことと思つて私に教えて下さつた琴を、貴君に教えましょう。弾いてごらんさい」と言つて、りうかく風（俊蔭から女に伝えられた琴）を仲忠の琴とし、ほそを風（俊蔭自身の琴）を自分が弾いて仲忠に教えるのに、仲忠はたいそう利口に上手に弾くのだった。

人氣も全くなく、熊や狼のようなけだもの外には姿をあらわすことのないこの深山で、仲忠母子がこのように美しい琴の音をたてるので、偶然それを聞きつけたけだものが、皆この空洞の付近に集つて来て、母子に対して同情の思いを寄せ、草木までがこの親子に心をよせたが、その中でも、峯一つ隔てた所にすんでいた堂々とした牝猿が、この音を聞きつけて、たくさんの子どもをひき連れて、この空洞のあたりにやつて来て、感心しながら聞いている。この猿も、また、大きな空洞を占拠して、長年の間、山に出来る物を取り集めて生活してきた猿であった。牝猿は、この仲忠母子の弾く琴の音にすっかり感心して、四季折々の木の実を持って、母子のもとへ、子どもとともに連れだつてやつて来る。このようにして、牝猿たちは、仲忠母子が琴を弾くのを聞いている。